■ガロワ／フランス・フルート音楽集

〔①プーランク:フルート・ソナタ ②メシアン:黒つぐみ ③P.サンカン:ソナチネ ④ジョリヴェ:リノスの歌 ⑤デュティユー:ソナチネ ⑥ブーレーズ:ソナチネ〕
パトリック・ガロワ(fl)リディア・ウォン(P)
［ナクソス⑪8.557328］
オープン価格

高橋 昭●*Akira Takahashi*

準 パトリック・ガロワの演奏に接するのは久し振りである。かつてのアイドル的な登場の仕方もあって、わが国のクラシック音楽界では正当な評価を十分にはされていなかったが、先輩のフルート奏者の多くが亡くなった今日ではフランスのフルート界を代表するひとりとして存在感を増している。

「フランス・フルート音楽集」と題されたCDでは、プーランクのソナタ、メシアンの《黒つぐみ》、ジョリヴェの《リノスの歌》、デュティユーの《ソナチネ》、ピエール・サンカンの《ソナチネ》のように演奏される機会の多い作品に、ブーレーズの《ソナチネ》を加えているところに彼の意欲を汲み取ることができよう。

演奏は全体として以前より垢抜けている。甘さを削ぎ落とし、すっきりした様式で一貫している。結果としてそれは作品の核心にいっそう迫ると同時に音楽の深い情感に到達することを可能にしている。

このことを痛感させるのがプーランクのソナタで、特に第2楽章の一見平明だが聴く人を感動させずにはおかない深い叙情性をガロワは音色、強弱、そして表情を細かく変化させながら表現している。

サンカンの《ソナチネ》はパリ国立高等音楽院ピアノ科の名教授の一面を教えてくれる。どちらかといえば保守的な作品だがフランス風の洗練された感覚が滑らかな音楽の流れを彩っている。ガロワの演奏もこの傾向を自然に生かしている。対照的にブーレーズの《ソナチネ》は十二音技法の影響を受けて決して聴きやすくはないが、彼らしい凝集力が強い説得力をもたらしている。ガロワの演奏は難しい技巧を駆使して強い集中力を感じさせる。